

ベルタ・フォン・ズットナーの文学について

——『機械時代』の文学批評を手掛かりに——

糸井川 修

キーワード：自然主義、リアリズム、平和運動、共苦、戦争体験

号令のもとで互いに殺しあわなくとも、闘うべき相手は十分ある。病気、洪水、雪崩、貧困、狂気、猛獣——それに野蛮な人間——これらはすべて、自分たちを守るために一層の闘争心をかきたてる敵である。(ズットナー『ある魂の財産目録』より)¹⁾

1) はじめに——平和運動家・作家ズットナー

ヨーロッパ平和運動の母とも呼ばれるベルタ・フォン・ズットナー（1843–1918）は、第一次世界大戦前の国際平和運動における最も著名な指導者のひとりである。彼女が平和運動家としての道を歩むきっかけとなったのは、1889年に発表した反戦小説『武器を捨てよ！』*Die Waffen nieder!*²⁾の思いがけない成功だった。この作品は、戦争の廃絶という大きなテーマに彼女が初めて本格的に取り組んだものであり、彼女の最も有名な作品であるとともに、その後の彼女の生涯を決定づけた最も重要な作品である。発表後、『武器を捨てよ！』はズットナーの代名詞となり、彼女はこの作品と題名の三語の呼びかけをもって平和運動の最前線で活躍する平和の闘士となっていった。

ズットナーは平和運動家として様々な国際会議に出席し、広くロビー活動を行い、平和運動の現状や国際的な政治状況について定期的に機関誌に報告を書き続けた。その一方で、作家としても小説を中心に作品を発表し続け、ノーベル平和賞を受賞した翌々年の1907年には12巻の全集を出版している³⁾。それゆえズットナーのことを紹介する場合、「平和運動家（Pazifistin,

Friedenskämpferin)」と「作家 (Schriftstellerin)」という二つの肩書きが併記されることが多い。

彼女が執筆活動を始めたのは、1876年の結婚直後から9年に及んだコーカサス滞在中のときである。最初の小説『ハンナ』*Hanna* は1882年に出版されている。彼女はこの頃から同時代の作家たちと交流を持ち始めたようで、『回想録』*Memoiren* (1909) には、「当時はまさに『文学の革命』の時代だった、そして私たちは強い関心を持ってこの革命のあとを追いかけた⁴⁾とある。ここに言う「文学の革命」とは自然主義文学のことであり⁵⁾、実際に彼女はスカンジナビアの自然主義の先駆者ゲオーア・ブランデスと文通したり、ミヒャエル・ゲオルク・コンラートが編集するミュンヘンの自然主義の機関誌『ディ・ゲゼルシャフト』に『エス・レーヴォス』*Es Löwos* (1886) など数編を寄稿したりしている⁶⁾。

1885年、ズットナー夫妻は結婚に反対だった夫の両親の許しを得てオーストリアに帰国するが、この頃彼女は自然主義作家たちとの交流を保ちながら『ダニエラ・ドルメス』*Daniela Dormes* (1885) や『ハイライフ』*High-life* (1886) など幾つもの作品を続けて発表した。そして1886年から87年にかけての冬、パリを訪れ、親交のあったアルフレッド・ノーベルに会った彼女は、知人たちとの語らいの中で戦争の廃絶を目指す平和運動の存在を知る。「この平和連盟に貢献したい——その理念を広げる本を書くよりほかに、私にそれをよりうまくできる方法があるだろうか」(Leb 215)。そう考えたズットナーは、『武器を捨てよ!』の執筆にとりかかり、およそ三年の歳月をかけて作品を完成させた。

ズットナーの初期の作品群において、タイトルだけを見れば、『武器を捨てよ!』のように反戦姿勢を示すものは他にない。しかし、ダーウィンの進化論やバククルの『イギリス文明史』(1857、1861) に親しんでいた彼女は、すでに『ある魂の財産目録』*Inventarium einer Seele* (1883) の中で「戦争の精神」「軍縮」「世界平和の理念」などを扱った章を設け、『『平和』という概念も私の喜びのひとつであり、私の信条のひとつである」(Inv 100) と前置きしたうえで、戦争を文明の進歩に背くものとして強く批判している。そこで引用されるバククルの言葉は、いわば彼女の信念を代弁するものだ。

「人類の知る最大の悪」——その偉大な思想家は彼の著作の第4章にそう記しているが——「宗教的な迫害を除いて最も大きな苦悩の原因となってきたのは、間違いなく、戦争の遂行という慣習である。この野蛮な手段が社会の進歩とともに永続的に用いられなくなっていくことは、ヨーロッパの歴史を表面的に読んだだけでも明白であるに違いない[….]」(Inv 102)

この「人類の知る最大の悪」、戦争という巨大な相手に、ズットナーは作家として、どのよ

うに立ち向かおうとしたのか。彼女の文学の特質はどのような点にあるのか。それは非常に大きなテーマであり、簡単にすべてを論じることはできないが、本稿では彼女の著作『機械時代』の文学批評を手掛かりにして、『武器を捨てよ!』や『回想録』、レオポルト・カッチャーによるズットナー全集の序文⁷⁾などを参照しながら探してみたい。

2) 『機械時代』の文学批評

ズットナーは、『武器を捨てよ!』とほぼ同じ時期に『機械時代——私たちの時代に関する未来の講義』*Das Maschinenalter. Zukunftsvorlesungen über unsere Zeit* (1889) を発表した⁸⁾。この作品は、副題が示すように未来の視点から当時の19世紀後半の社会を振り返り、様々な分野にわたって論評を加えたものである。そのうちの第8章が「文学、芸術と科学」に関する章で、文学については10ページほどが充てられている。ズットナーはそこで当時の(すなわち彼女と同時代の)文学傾向を客観的に論じているが、その内容はまさに彼女自身の文学の特徴として捉えることも可能だと思われる。そこで該当部分を紹介しつつ、ズットナーの文学について論じることとする。

2-1) リアリズムと自然科学

『機械時代』の第8章では、19世紀後半の文学について述べる前に、それまで「世界文学(Weltliteratur)」として偶像崇拝的に高く評価されていた文学への言及がなされている(MZA 250ff.)。ズットナーによれば、そのような評価は、これまで「同時代人ではないこと」が「作家が偉大であること」の主要な条件とされてきたことによる。古い作家ほど時代と共に評価が積み重ねられ、ついには「昔から有名な作家の偉大さは、ただ天賦の力のみによる」と信じられるようになる。そうした「神聖なもの」に祭り上げられた「天才」には、ソフォクレス、ヴェルギリウス、ダンテ、シェイクスピア、ミルトン、セルバンテス、ゲーテらが連なる。しかし「世界は前へ進んでおり、その中のすべてのものが、芸術家も詩人もであるが、進歩している」。それゆえ「時代精神の光を映し出す」芸術がいくら「素晴らしく磨かれた鏡」であったとしても、(進歩した)現実の投じる光よりも優れた光を映し出すことはなく、文学や芸術家に対するかつてのような偶像崇拝はなくなってしまった、としている(MZA 250ff.)。

また、この時代(19世紀後半)に文学や作家に対する関心が薄れつつあったことについて以下のような言及もある。「教養の広がり和本や雑誌の予測不能な多様化」とともに、文学の宝庫が質的、量的に成長した結果、以前のように目に見える傑出した作家は存在できなくなった。「印刷術の発明」と「新聞」の登場による読者の激増によって、『『古典的』作品の時代は

過ぎ去った」というのである。さらに軍事国家であったドイツでは、「最も強い関心と最高の国家的自負は戦争と政治に関する事柄に向けられ」、文学や作家に関心が向けられることはなかった。特に、「男性は読書をせず」、休養の時はその日に起こりそうな出来事をネタにビアハウスやカフェーでの議論を好んだ。従って「読み物は新聞に載っているもので足りた」。女性のための文学も登場し、雑誌は普遍的な読者の需要に対応しようとしたが、作家に求められたのは「害にならない、傾向ものではない、思想を含まない、張り詰めた展開と満足させる結末の物語」でしかなかった。その結果、現代のドイツ作家全体の評判が落ちてしまった (MZA 252ff.)。

こうした中でひとつの「新しい流派」(MZA 257) が登場したことを、次のように紹介している。

「真実、真実、真実！」との叫び、それは科学の領域からほとぼしり出て、ひとつの領域から別の領域へと反響し、他のどこよりもいっそう大きく文筆家たちに響き渡った。「仮面をはがせ、慣習と決まり文句を捨てろ——現実を我々は欲する、自然を我々は欲する、鮮やかな、生きた、真実のそれを！」そして、あらゆる現象を「一主義 (イズム)」の型にはめ込む昔ながらの衝動に従って、この現実のもの、自然のもの、真実のものを追及する傾向は、即座にリアリズム (Realismus)、自然主義 (Naturalismus)、真実主義 (Verismus) と名付けられた。(MZA 257f.)

文学史からの引用を思わせるような文章であるが、明記されているように、この流派は「自然主義」である。「リアリズム」とも書かれているが、それはいわゆる初期の詩的写実主義ではなく、時代の問題に目を向け、社会批判の観点から現実を描き出そうとした自然主義のリアリズムを指すと理解してよいだろう。自然主義文学においては、「とりわけ小市民階級とプロレタリアートの道徳的、経済的な貧しさ、大都市の中で排斥された者たちの状況、貧困、病氣、悪習、犯罪などの描写」に関心が向けられ、それとともに「市民階級と彼らの楽観主義、二重道徳、成立しつつある産業社会で未解決の文明的問題に対する無関心への積極的な批判」も加えられた⁹⁾。

こうした諸問題の中で、戦争は明らかに「人類の最大の悪」でありながら、当時の文学作品で批判の対象として取り上げられることは稀であった。戦争の醜悪な場面が描かれることはあっても、それは戦争を批判するためではなく、敵に対する憎しみを煽るためのものでしかなかった¹⁰⁾。そのような中で『武器を捨てよ!』は、戦争自体の残酷さと野蛮さに真っ向から批判を加えたのである。それは、M. G. コンラートの言葉を借りれば、「あらゆる論拠をやりこ

め、あらゆる反論を沈黙させ、今日の戦争の文化経済活動の愚かさや血生臭い滑稽さを容赦なく暴き出し、何らかの邪悪な利害関係を理由に戦争を根絶しがたいと主張するすべての人を炎の鞭で糾弾する、戦争に対する芸術的闘争文書」になろうとした作品であった¹¹⁾。ズットナーは、戦争という慣習が残っているのは、人々の無知と無頓着さによるのであって、その悲惨な現実を知らされれば、人々は戦争を拒絶し、軍国主義に反対するだろうと考えていた¹²⁾。彼女は作品に込めた思いを次のように述べている。

私が望んだのは、自分が考えたことだけでなく、感じたこと——激しく感じたこと——を、本の中に書き込めるようにすることだった。戦争を想像したときに私が心に感じた焼けるような痛みを、私は表現したかった。——命、痛みにうづく命——現実、歴史的現実を私は描き出したかった。(Leb 215)

この言葉の通り、『武器を捨てよ！』が戦争の悲惨さを描いたリアリズムの作品であることに異論を唱える人はいないだろう。作品では、戦場の残酷な様子が主人公の夫フリードリヒの手紙によって次々と伝えられている。そのような手紙を書き続けることについて、「それは僕が真実を渴望し、真実を率直に表現したいから、いつだって嘘っぽい決まり文句を憎んでいるからだ」(DWN 145)と彼は記している。フリードリヒの語る戦場の様子や主人公マルタを気絶させる瀕死の負傷兵の様子は、当時、出征した男たちでなければ一般には知ることのない事実であった。その悲惨さは戦場だけでなく、引き揚げ兵が原因となったコレラ蔓延の悲劇にも及んでいる。ズットナーは作品を書くために、「1859年、1864年、1866年、1870-71年の出兵に関する報告、様々な司令官の回想録を読み」「外科医、軍医、それに『赤十字』の人々の手記を吟味し」「図書館や公文書をくまなく捜し」た、と記している¹³⁾。

また、この物語が「女性・妻・母親の視点から語られている」¹⁴⁾ことも大きな特長である。作品では、出征した夫を心配する妻の心情や愛する子供の戦死に打ちひしがれる母の姿など、女性の目から見た（それはすなわち人間性の目から見た）戦争という男の論理の矛盾が際立つように描かれている。さらに過去の戦争のノスタルジックな称賛とは対照的に、まだ人々の記憶に残る同世紀の敗戦続きの戦争を取り上げたことも重要である¹⁵⁾。ズットナーは、歴史資料を頻繁に引用しながら、戦争がどのようにして意図的に作り出されるのか、いわば戦争発生メカニズムまで描き出そうとしている。戦争は、いつも人間が作り出すものなのだ。

ズットナーにとっては、こうした戦争の真実をいかに多くの人に伝えるかもまた重要な問題であった。彼女が『武器を捨てよ！』を新聞で発表しようと考えたのは¹⁶⁾、幅広い読者層に求めやすい形で読まれることを考えたからであろう（それは断られ、結局2巻の単行本として出

版された)。対象となる読者は男性、女性ともに考えられるが、とりわけ彼女は深い思慮もなく戦争に協力し、夫や子供を戦場に送り出してきた女性たちに戦争について考える機会を与えようとした。『武器を捨てよ!』をはじめ、彼女の小説の多くが恋愛物語の体をなしているのは、女性読者の関心を惹きやすくするためであろう。彼女は「文学 (Bellettristik)」について次のように述べている。

文学には、仕事のない人々の退屈な時間をなくすことよりもっと崇高な義務があります。本というものは、考えるきっかけを与えなければならないのです、それが専門書 (Fachwerk) であっても、小説 (Roman) であっても、最も厳密な意味における文学 (Dichtung) であっても。¹⁷⁾

このような文学の役割についての考えは、さらに一步踏み込んで、傾向文学の肯定にも繋がる。『武器を捨てよ!』が、戦争の廃絶と仲裁裁判所の設置を進める運動のために書かれた作品であることに間違いはない。ただ、傾向文学というレッテルには、一般に作品の質や芸術性の低さというイメージが纏わりつく。ズットナーは傾向小説作家という批判に悩まされたが、それに反論するように、ある登場人物に語らせている。

私は傾向小説を素晴らしい友としています、なぜなら私の見るところ、この言及した芸術ジャンルには、他の文学作品よりも優れた長所があるからです。それはつまり、批評の際、述べられたテーゼに対して読者一人ひとりに賛成なのか反対なのかを考えるきっかけを与え、それによって思考が活発になり、意見を闘わせる喜びが生まれ、理念が磨かれるという特性です、そして、確実にそこからまた幾つもの真実の火花が飛び散るのです。¹⁸⁾

ところで、『機械時代』の文学批評には、19世紀後半のリアリズムは「最新の科学研究の成果に基づく」ゆえに、真実の追求という意図は過去の文学と変わらなくても、「諸々の真実それ自体が新しいものとなる」とある。そして、「あの新しい時代が見たものとは、自然の必然性の揺るぎない支配、見かけ上極めて独立している出来事の因果関係、物質と結びついた人間の心の病理学的現象、遺伝の影響、あらゆる物事の不変の発展である」と述べられている (MZA 259)。

ズットナーはコーカサス時代に沢山の書物をヨーロッパから取り寄せ、夫と共に貪るように学んだことを『回想録』に記している。その中でも「私たちの精神に予想もしないことを解明させたのは、とりわけ自然科学だった」。彼女は、その自然科学への関心について上記の『機

械時代』の引用と似たことを記している。

私たちは最新の自然学者から知識を手に入れたが、彼らは同時に自然哲学者でもあり、彼らの研究からひとつの新しく輝かしい発見、すなわち、私たちの素晴らしい世界全体は発展の法則のもとにあるということが明らかになった。この世界は極めて単純な諸々の根源から発展して今日の複雑な状態に至っており、それにはまだ予測不能な未来の姿が保証されている。さらに現代知識がもたらすその他の認識、すなわち、ひとつの力から別の力への諸々の力の可変性、あらゆる因果関係の確かな連鎖、原子の不可分性、無機世界と有機世界の、そして精神的活動と身体的活動の間の継続性——簡単に言えば、世界の一貫性は、人間の社会の発展も同じ法則によって起きること、そしてそこにも予測不能な未来の姿が保証されていることを推測させる。(Leb 187)

この引用によれば、ズットナーの関心は主として、一切の事物における進歩・発展の法則と因果・相関関係という二点にある。そこから、戦争という野蛮な慣習は時代と共に減少し、やがてはなくなるということ、また「平和は文化の進歩によって必然的に導き出される状態である」(Inv 107) という結論が引き出される。しかし、それが達成されるには長い時間がかかり、手遅れになる前に平和への歩みを加速する必要がある。そのために彼女は平和運動に関わり続けたのである。ひとりの人間が世界に及ぼす力を信じるゆえに、彼女はどのような苦境であろうと最期まで平和のために闘い続けたのだ。

『武器を捨てよ!』では、文明の進歩を確信するフリードリヒが、戦争を次のように捉えている。

「なぜなら」と言って、フリードリヒはポケットから鉛筆を取り出し、一枚の紙に螺旋を描きました。「なぜなら、文明はこのようにして進歩するからです。この線は、時々曲がって逆戻りしますが、確実に前に進んでいないでしょうか？ もちろん、今始まったばかりの一年が曲線を描くことだってあります。特に、現れている予兆通りに、再び戦争が始まった場合です。戦争により、物質と道徳の両面で、文化の著しい後退が繰り返されるのです」(DWN 187f.)

当時の人々の考えでは、戦争はいわば「地震」のように必然的に起こる「自然の法則」であり、なくすことなどできないものだった。「戦争は常にあったのであり、したがってこれからも常に戦争はあり続ける」(DWN 184) という固定観念こそ、ズットナーが打ち砕かねばなら

ない最も大きな壁だったと言える。それを覆すために、彼女は作品の中で繰り返しトーマス・バッケルを引用し、文明の進歩とともに人間の「戦争の精神 (Kriegsgeist)」は確実に減少していくこと、そして戦争のない時代が必ず到来することを訴えたのである。

2-2) 共苦 (Mitleid)¹⁹⁾

『機械時代』には、19世紀後半の「若者たち (Junge)」の作品に見られる「溢れんばかりの共苦 (ein umfassendes Mitleid)」(MZA 260f.) についての言及がある。作家は「自分の周囲の苦しみや発せられない苦悩」を感じ取り、「自身の内面で鳴り響くその世界苦を、すすり泣く歌の中に発露する」。しかし、この世界苦はそれ以前の文学に支配的であった愛の苦悩などを誇張する「自己の苦悩の利己的な賛美」とは違うものだという。

当時、文学の中に表れていたその苦痛の叫びは、共感 (Mitempfinden) という利他的な心の動きから生まれ、これほど美しく、これほど歓喜の充溢の可能性に富んだ世界の只中で、いまだに精神の隷属と不幸に苦しまねばならない幾百万の同胞に向けられた。(MZA 261)

この文章は、進歩しつつある社会の中で虐げられた境遇にある人々への共苦を想像させる。しかし、このあとズットナーが引用するのは、9月の暑い日に自然の中を散策する詩人が牛の鳴き声を聞いて襲われる戦慄である。それは「すでに幾度となく、激しく彼が感じていた」もので、「彼にはそれに責任があるように思われる」。引用されるのはデートレフ・フォン・リリエンクロン (1844-1909) の詩である。

お前は何を望むのか、動物よ。それは確かに耐えられないことだ！
お前は、哀れな人間の嘆きなのか
不正な判決を法廷で受け
そして今、狂わんばかりに理解できないでいる
それが起きたことと、太陽が
落下しなかったことを、その判決が下されるときに [...] (MZA 262)

このような苦痛の叫びは、「ようやく動物性から人間性が生まれ出た時に、そしてようやく——とてもゆっくりではあるが——人類が人間らしい存在へと引上げられたときに」聞き取ることができるようになったのであり、「すでに太古の時代にも、ときおりそのように鋭い感覚

をもつ存在——仏陀やキリスト——が現れて、共感 (Mitgefühl) に打ち震えた」。しかし、「嘆きと非難を口にする者たちが呼びかけ続けたあの二つのもの、同情心 (Erbarmen) と正義 (Gerechtigkeit) に全人類が目覚めるまでに、どれほど長い時間を要しただろう」と著者は厳しく批判する (MZA 262)。

ここでは、悲惨な境遇の人々に対して無感覚である個人に批判が向けられているのではない。人間全体の存在に関わる問題として、未だに野蛮なままで動物性から抜け出していない人類への批判、倫理と人間性に欠ける社会や世界に対する苦悩が語られていると言えるだろう。ズットナーはダーウィンの進化論やバククルの社会進化論を自己流に解釈し、人類は道徳的領域においても善性に満ちた高貴な存在に変化していくと強く信じていた²⁰⁾。彼女の考えでは、共苦もまた人間の向上と結びついた感情なのである。共苦は「人間の——しかも文明化した人間の——登場と共に広がり始めた」「感情の華 (Gefühlsblüte)」であり「美德」であって、「それが私たちの存在の高貴化 (Veredelung) であることは確かである。私たちの心情が発達すればするほど、私たちの共苦はいっそう容易に目覚めるようになり、それが及ぶ範囲はいっそう広がる」。「大衆の貧困や汚れや無知への思い、不健康な労働区域や飢えた村々に巣くう多くの苦しみへの思いは、普段は無頓着な人々の懸念となり、人道的な努力へと転換される」のである²¹⁾。

このように考える彼女にとって、人々を苦しめる新しい時代の社会問題はもちろん見過ごせないが、太古の時代から続く最も野蛮で非道な慣習、すなわち戦争こそ真っ先に無くさねばならないものだった。『機械時代』で述べられている「世界苦」は、19世紀に入って格段に進歩をとげた文明社会において、いまだに戦争という悲惨を生み出し続けている人類にも向けられるだろう。そして、その現実に対する自身の関与と責任を感じる時、それは後悔 (Reue) の念を生む。『武器を捨てよ!』の中で、戦場の悲惨さを体験したフリードリヒは、その複雑な感情を「時代の良心に対する憤り (ein Vorwurf des Zeitgewissens)」と表現する。

痛ましい悲惨を目の当たりにして、「こうならなければいけなかったのだろうか？」という疑問がひとたび湧き上がるや、冷酷な心のままではいられなくなるのです。そして憐憫の情 (Mitleid) とともに、悔いのようなものが胸を締めつけて……いえ、それは決して個人的な後悔ではありません。なんと云えばいいのでしょうか——時代の良心に対する憤りでしょうか。(DWN 94)

こうした体験を重ねた後、フリードリヒは軍隊を退き、平和のための活動を開始する。作品では、戦争廃絶のために努力する「気高い人間 (Edelmensch)」という理想が語られるが、主

人公マルタにそのモデルとして映るフリードリヒは、とりわけ「共苦」の感情に満ちた人間として描かれている。彼が最初にマルタを訪問したのは、彼女の苦悩を和らげようと、亡夫アルノーの戦場での最期が榴弾の爆破による瞬時のもので、苦痛に満ちた死ではなかったことを知らせる為である。その話を「軍人に相応しくない」と聞き流す父とは対照的な、彼の「人間としての気高さが示した（戦争への）嫌悪」に、彼女の心は惹かれてゆく（DWN 58）。そして、夫の死を通じて彼女に生じた戦争への疑問と共苦の感情も、フリードリヒとの語らいを通じて大きくなるのである。

また、共苦をズットナーの文学に欠かせない特徴のひとつとするカッチャーは、「彼女は苦しんでいる生きものすべて——人間と動物——あらゆる種属の苦しみを、心を打つ倫理的な共苦で共にする」と述べている²²⁾。フリードリヒの共苦が戦場で犠牲になる動物にも及んでいるのは、その例と言えるだろう。生きものに対する愛情のまなざしは作品の随所に見られるが、フリードリヒは炎に包まれて喘ぎ苦しむ馬の息の根を止めたり、泥沼で鞭打たれる馬車馬になった夢を見たりする。それは、彼の愛情の深さとともに戦争の矛盾と不合理をいっそう際立たせている。

人間は、なぜ自分たちの命が危険にさらされているのかを知っている、どこへ行くのか、何のためなのかを知っている——しかし、不幸な僕たちは何も知らない、僕たちの周りを囲むものは、すべて夜と恐怖だ。人間は味方と共に敵に立ち向かう、だが僕たちの周りはすべて敵だ……僕たちは主人に忠実に愛を捧げるつもりだった、それなのに最後の力をふりしぼって仕える僕たちを、主人は打ち据える……そして見捨てる……（DWN 225）

こうした共苦についての描写や記述は、『武器を捨てよ！』やズットナーの平和運動が「感傷的 (sentimental)」と批判された理由のひとつでもあろう。そのような批判は、軍国主義者だけでなく、ズットナーと同じ平和運動の側からもあがった。例えば、カール・フォン・オシエツキーは、「ひどく繊細でひどく世間知らずな女性の、あのお涙頂戴の小説がこの運動の出発点であったことが、恐らくこの運動の運命だった。ズットナーの並外れた、純粋な願望はあらゆる名誉に値するが、彼女はその理念に対して、情け深さ以上により力強い表現形式を見出せなかったのだ。彼女は聖水で大砲に立ち向かった […]」²³⁾と語っている。その一方で、この小説が想像を超える影響力を当時の人々にもたらしたのは、この作品に流れる、まさにズットナーの「共苦の力 (Mitleidenskraft)」²⁴⁾が読者に伝播したからではないだろうか。彼女の同志であったルートヴィヒ・クヴィデは後に当時を振り返り、「どんな会議も、集会も、演説も、チラシも、あの本ほど大多数の人たちを目覚めさせたことはなかった」²⁵⁾と証言している。戦

争が生み出す苦悩への共苦の広がり、戦争の現実への関心を高め、平和運動を広げる大きな力となったのである。

2-3) 未来の予見……作家の使命

ズットナーは自然主義の作家に相応しく、教養批判、女性解放、国家主義や反ユダヤ主義など様々な社会問題に関心を持ち、作品で扱っている²⁶⁾。『作家小説』*Schriftstellerroman* (1888)の登場人物には、「作家は役に立ち、心を高め、喜びを与えねばなりません——作家は真実、正義、美に奉仕したと言えなければいけません、喜びを阻む偏見を取り除かなければいけません、迷信と蒙昧を打ち壊す手助けをしなければいけません」²⁷⁾と語らせている。彼女には文学作品を通じて社会の改善と人々の幸福に貢献したいという強い願望があり、人類のより良い未来への貢献を、いわば作家の使命と理解していたように思われる。『機械時代』には、次のような一節がある。

詩人は未来の予見者である。彼の心の目は、来たるべきものに向けられている。現代に欠けているもの、現代の苦悩、現代の危機と欠陥であるものを、彼らは生き生きと感知する。ゆえに現代を誇りとする者、現代に満足している者は、彼らに共感しない。(MZA 260)

ここでの「詩人 (Dichter)」は、広い意味での「作家」として捉えたい。ズットナーによれば、この時代にはかつての天才に分類されるような詩人ではなく、「予言の才能と人類全体の痛み共感する心を持ち」、「開かれた精神と開かれた心を持つ」者の中から「溢れ出る自らの思想と感情を文学作品に書き下ろしたいという衝動」に駆られる詩人が現れる。「彼らの研ぎ澄まされた耳は同時代人の嘆きの声を聞き分け、彼らの昂る心は時代への憧れのなかで鼓動する」(MZA 260)。

現代社会の欠陥、時代遅れの思想への批判は、より良い未来を築くためのものである。そして現実を批判する者は、当然、それに替わるビジョンや展望を示す必要があるだろう。ここでいう「予言の才能」というのは、神秘的な力ではなく、科学的知見をもって来たるべき未来の世界像を示す力とも捉えられる。その力によって示される、より良い未来の姿は、強いメッセージとして人々に希望と現実変革への勇気を与える。

ズットナーの小説で作家の登場人物が目立つのは、作家のこのような使命と無関係ではないだろう。『武器を捨てよ！』の主人公マルタは作家ではないが、自伝を執筆することによって、自分が体験した戦争の真実を世に伝えようとする。また、その続編の『マルタの子供たち』

Marthas Kinder (1903) では、マルタの娘ジルビアを心から愛し、夫の不義に苦しむ彼女を古いしきたりから解き放って救おうとするのが作家フーゴー・ブレッサーである。また、ズットナーの最後の小説『人類の崇高な思想』*Der Menschheit Hochgedanken* (1911) において、主人公フランカ・ガレットを新しい時代の女性指導者に導くクロードヴィヒ・ヘルマーも作家（詩人）である。彼は世界を旅して周った後に創作に取り組み、高い文学的評価を得るなかで壮大な叙事詩を書き上げる。それは人類が獲得した航空技術を軍事利用から守り、人間の精神の飛翔を促す作品である。

だが最も大きな成功を取めたのは、彼の叙事詩『翼 (Schwingen)』だった。そこには、イカロスからツェッペリンとブレリオに至るまでの空の世界を支配する歩みのすべてが歌われていた。だが、さらに予言的な調子で、未来を見据えて——そして作品のこの部分はさらに壮大なものであったが——人間の創造的精神による成果の中で最も強力な、あの成果によって起こるであろうと思われる変化が描かれていた。特に詩人が歌ったのは、いわば物質の翼と相まって、人間の精神と人間の道徳的意志をより明るい領域へと運ぶ翼であった。²⁸⁾

自然主義の文学作品は社会問題を孕む現実の描写に力点が置かれることから、ペシミスティックで思想的な深みに欠けやすいことが指摘される。しかしズットナーの作品には、上記の引用に見られるような未来への明るい希望を示すものが多い。これは『武器を捨てよ！』についても言えることである。すでに述べたように、この作品は彼女が仲裁裁判所の創設を目指す平和運動の存在を知り、それを支援しようとして書き始めたものだが、作品のエピローグに掲載される運動の中心者ハドスン・プラットから主人公に送られた手紙は、とりわけ新しい時代の到来を予感させる。

あなたが人生を捧げてこられた重大な問題の現状についてお尋ねを頂き、光栄に存じます。私のお返事をここにお届けいたします。世界史において、おそらく今日ほど平和と友好を築く好機はありません。長く続いた殺戮と破壊の夜が、今ようやく明けようとしているかに思われます。そして人間性という峰の頂に立つ私たちは、天上から地上に射し込む曙光の最初の一筋を見られるだろうと考えています。(DWN 392)

このような書き出しから始まる手紙には、1889年に開催された二つの会議、すなわち各国の平和協会の代表が集った第一回「世界平和会議」と諸国の平和を願う国会議員が集った「列

国議会同盟」の第一回会議の開催が、「将来、戦争が人類史における最も愚かで犯罪的な汚点であると見なされる時代が到来する兆し」(DWN 393)として挙げられている。作品ではまだ詳細が語られていない、この二つの会議を中心とする運動は、第一次世界大戦が勃発するまでのヨーロッパの平和運動の主流となっていく。そしてズットナーは自ら、その運動の中心者の一人として、戦争のない世界という予見した未来の実現のために闘っていくのである。

3) ズットナーの戦争体験

『武器を捨てよ!』の出版当時、主人公マルタの体験は著者であるズットナーの体験として読者に受けとめられた。作品が同時代を生きる女性の自伝風の語りで書かれていることが、何よりもそう感じさせた理由だろう。しかし、語りの形式だけでなく、扱われている生々しい戦争体験や戦争被害者への共苦、またそれらを通じて主人公が獲得する強い反戦の意志などから、今日でも読者は著者の戦争体験に関心を抱くにちがいない。『機械時代』の文学批評とは直接関係ないが、リアリズムとの関連からここでズットナーの戦争体験についても確認しておきたい。

私個人には戦争で何か苦しんだような経験はまったくない。私にとってかけがえのない誰かがその危険に晒されたことも決してない。また一度として戦争によって何か財産を失ったこともなければ、そうした苦しみのどれかを味わったこともない……それでももし、戦争に対する私の嫌悪感の起源を一つに帰そうとするのであれば、それは私の身に直接起こったことではなく、ただ私が読んだものだけである。²⁹⁾

この手記にも見られるように、ズットナーは折に触れて切実な戦争体験がないことを表明している。しかし、戦争を身近に感じる機会が彼女になかったわけではない。ズットナー夫妻がコーカサス地方のクタイシに到着して一年も経たない1877年4月、ロシアがトルコに宣戦布告をして露土戦争が始まった。両国に挟まれる位置にあるコーカサスは戦場のひとつとなり、トルコ軍のクタイシへの侵攻も考えられた。この時のことについて、ズットナーは『回想録』の中で、「私たちが不安を感じていた記憶はない。戦争一般に対する抗議の感情も感じなかったのは、1866年(訳注:普墺戦争)や1870年(訳注:普仏戦争)の時とまったく同じだった」と前置きしながらも、「突然、近辺でペストが発生したという噂が流れた。それは私たちを恐怖で満たした」といった出来事や、戦争の影響によって収入が極端に減り、「私たちは当時、『飢え』という幽霊と顔を合わせる日さえ、幾日かあった」(Leb 178)という辛い経験を綴っ

ている。「クタイシでは多くの家庭が喪に服していた。帰還中だった百人は、百人で帰還しなかった」(Leb 178)との記述からは、後に作品で描かれるような悲嘆にくれる遺族の姿を彼女が目当たりにしたことも考えられる。また、ズットナーが執筆活動を開始したのは、この時期に夫のアルトゥーアが露土戦争の報告を新聞社に送り始めたことがきっかけであり、彼女もこの戦争に無関心でいらなかったことは容易に想像できる。近年の研究でも、例えばコーエンは、ズットナー夫妻が露土戦争の影響を受けずに暮らすことは不可能だったとして、ズットナーが帰りの遅い夫を何時間も待つ夜、彼が殺されて川に投げ捨てられたのではないかとの恐怖に襲われ、パニックに陥ったことなどを紹介している³⁰⁾。

この露土戦争では、ズットナー夫妻はバルカンにいる「スラブの兄弟を解放する」「ロシア側に共感を抱いていた」。二人は当初、負傷者を介護するロシア赤十字の活動に参加しようとしたが、同じ場所で働くことが無理と分かり、やむなく断念した。そして銃後の人々が戦場の兵士に物資を送る支援活動などに励むなか、彼女もクタイシの淑女たちが企画する負傷者のための催しに熱心に参加した。このような慈善事業の様子は『武器を捨てよ!』の中にも描かれているが、『回想録』では「今日、私にはこの最善のことよりもっと良いことがあるように思われる。それは彼らを送り出さないことだ!」(Leb 176)と振り返っている。

一年あまりで終結した露土戦争の期間の苦しい生活について、『回想録』には次のような記述がある。

後に私たちは、このような経験によって自分たちを豊かにしてくれた運命を称賛した。それらは恐らく、私たちの性格を鍛えることと、やがて公共への奉仕という私たちの協同の礎となり、私たちの中に次々とその喜びを感じさせる心情を目覚めさせた、あの人類の苦悩と民衆の悲惨への関わりを教えることに繋がった。(Leb 178)

つまるところ、露土戦争はズットナーに戦争体験を与えたのである。それは、彼女が後に身を捧げる平和運動、すなわち「人類の苦悩と民衆の悲惨への関わり」に彼女を導く、人生の貴重な礎となった。彼女は戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える反戦小説において、こうした体験と経験による認識が重要な鍵となることを踏まえて、『武器を捨てよ!』の執筆に取り組んだものと思われる。「私はいかにして『武器を捨てよ!』を書くに至ったか」という文章の中で、彼女は次のように書いている。

私はもともと短い小説を書くつもりだった。ある若い女性についてのもので、彼女は心から愛する夫を戦場で失い、それによって戦争を非とする考えに至る、ちょうど私自身が次

第にそうなったように。私の場合、この確信はもちろん理論だけに拠っていたが、私の主人公は自らの体験と経験を通じてこの見解に考えを改めることになる。³¹⁾

4) 終わりに

創作し、思索し、筆を執る同時代人の中に、真っ先に最も激しく時代の苦悩と切望にとらわれ、共に悲しみ、共に嘆いて、その苦悩を和らげ、切望を叶えることに貢献する——貢献せずにはいられない——人たちもいるということ、そして彼らが、精神の闘いによってもたらされる、より良き未来の到来を真っ先に見る人でもあり、自ら——最も情熱的に——闘いながら、そのより良い未来を導く援助を真っ先に行う、行わずにはいられない人たちでもあるということ——それを人々はほとんど知らなかった。(MZA 263)

これまで見てきたように、ズットナーが『機械時代』の文学批評で取り上げた同時代の文学は自然主義の文学である。本稿では、彼女が言及したリアリズム、自然科学の影響、共苦（共感）、未来の予見といった特徴を彼女自身の作品に結びつけて考察したが、これらの特徴はいずれも文学史や文学事典の自然主義のキーワードとして列挙されるものである。自然主義が「攻撃姿勢のリアリズム」³²⁾とも言われるように、ズットナーもまた戦争の廃絶という大きな目的を達成するために、自らの文学作品によって戦争の真実を社会に訴えた。

『武器を捨てよ！』や彼女の反戦の思想・行動に対しては、当時「素朴 (naiv)」「感傷的」という批判が多く浴びせられた。しかし、それは表面的な捉え方であって、実際に作品を読めば、彼女がいかに冷静に政治・社会状況を分析し、論理的に戦争の矛盾と不合理を示そうとしたかに気づかされる。『機械時代』の初版は、女性作家の能力に対する偏見によって読者が減ることのないように、「ある人 (Jemand)」という匿名で出版された。その結果、この優れた評論は匿名の著者が誰なのか人々の話題になるほど、社会の注目を浴びることになった。この事実によっても、彼女の知性を無視し、感情面ばかりを強調する批判が的外れであったことは明らかである。むしろ、カッチャーが「彼女の独特の存在の、そして彼女の大きな文学的成功の秘密は、まさにこの際立った心情と理性の、プシュケーとロジックの混在にある」³³⁾と述べたように、ズットナーは感情と理性という二つの力のどちらにも偏ることなく、真正面から人間を捉えた作家と言えるだろう。この地上から戦争をなくすために、人間一人ひとりの、そして全人類の持てるあらゆる力の結集を目指し、連帯に向けて粘り強い行動を続けた彼女に、私たちは未来の平和を創造する道を学ばねばならない。

注

- 1) Suttner, Bertha von: *Inventarium einer Seele*. In: Suttner, Bertha von: *Gesammelte Schriften*. 12 Bde. Dresden o. J. [1907] Bd. VI, S. 120. 以下、本作からの引用については、本文中に Inv の略記号とともに頁数を () 内に記す。なお、ズットナーの諸々の作品からの引用については、ブリギッテ・ハーマン『平和のために捧げた生涯——ベルタ・フォン・ズットナー伝』糸井川修・中村実生・南守夫訳、明石書店、2016年、原著 Hamann, Brigitte: *Bertha von Suttner. Ein Leben für den Frieden*. Piper Verlag. München 2009, 4. Auflage にその日本語訳がある場合、おおむねその訳に従った。
- 2) Suttner, Bertha von: *Die Waffen nieder! Eine Lebensgeschichte*. 2 Bde. E. Pierson. Dresden, Leipzig 1889. なお、本稿では Suttner, Bertha von: *Die Waffen nieder! Eine Lebensgeschichte*. Hrsg. und mit einem Nachwort von Sigrid und Helmut Bock. Berlin 1990 を使用し、引用や関連箇所を表示については DWN の記号とともに頁数を () 内に記した。日本語訳はおおむね、筆者も翻訳作業に加わった次のものに拠る。ベルタ・フォン・ズットナー『武器を捨てよ!』(上)(下)、ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年。
- 3) Suttner, Bertha von: *Gesammelte Schriften*. 12 Bde. Dresden o. J. [1907].
- 4) Suttner, Bertha von: *Lebenserinnerungen*. Hrsg. und bearbeitet von Fritz Böttger. 6. Auflage. Berlin 1979. S. 199. 本書は、Suttner, Bertha von: *Memoiren*. Stuttgart und Leipzig 1909 の新版である。以下、前者からの引用については、本文中に Leb の略記号とともに頁数を () の中に記す。
- 5) Vgl. *Metzler Literatur Lexikon. Begriffe und Definition*. Hrsg. von Günther und Irmgard Schweikle. Zweite, überarbeitete Auflage. Stuttgart 1990. S. 320ff.
- 6) Vgl. Biedermann, Edelgard: *Nicht nur Die Waffen nieder!: Bertha von Suttner*. In: Tebben, Karin (Hrsg.): *Deutschsprachige Schriftstellerinnen des Fin de siècle*. Darmstadt 1999. S. 320.
- 7) Katscher, Leopold: *Zur Einführung!* In: Suttner, Bertha von: *Gesammelte Schriften*. 12 Bde. Bd. I, S. III–XIX. レオポルト・カッチャー (1853–1939) はオーストリアの評論家で、オーストリアとハンガリーの平和協会の役員を務めた。雑誌『武器を捨てよ!』の編集者 (1895/96) でもあり、ズットナーの伝記 *Bertha von Suttner, die Schwärmerin für Güte*. E. Piersons Verlag, Dresden 1903 の著者でもある。
- 8) *Das Maschinentalter. Zukunftsvorlesungen über unsere Zeit*. Pseudonym Jemand. Zürich [1889]. 本書の書名は後の版で *Das Maschinenzeitalter* と改められた。本稿では Suttner, Bertha von: *Das Maschinenzeitalter. Zukunftsvorlesungen über unsere Zeit*. Dritte Auflage. Dresden und Leipzig 1899 を用い、引用や関連箇所を表示については MZA の記号とともに頁数を () 内に記した。
- 9) *Metzler Literatur Lexikon*. S. 320.
- 10) Vgl. Schenda, Rudolf: *Volk ohne Buch. Studien zur Sozialgeschichte der populären Lesestoffe 1770–1910*. Frankfurt 1970. S. 153. Zitiert nach: Häntzschel, Günter: *Die Waffen nieder! Bertha von Suttners Antikriegsroman. Zur Poetik und Ideologie der Frauenliteratur*. In: Borchmeyer, Dieter (Hrsg.): *Poetik und Geschichte. Viktor Zmegac zum 60. Geburtstag*. Tübingen 1998. S. 107f.
- 11) Conrad, Michael Georg: *Kritik. Romane und Novellen. Die Waffen nieder!* In: *Die Gesellschaft* 6 (1890). S. 433. この批評は辛口で、『武器を捨てよ!』は残念ながら引用部分が示すような作品には至っていないとしている。
- 12) Vgl. Kovács, Henriett: *Die Friedensbewegung in Österreich-Ungarn an der Wende zum 20. Jahrhundert*. Hrsg. von Dieter A. Binder, Georg Kastner und Arnold Suppan. Herne 2009. S. 70.
- 13) Suttner, Bertha von: *Wie ich dazu kam, „Die Waffen nieder“ zu schreiben*. In: Suttner, Bertha von: *Aus der Werkstatt*

- des Pazifismus*. Leipzig und Wien 1912. S. 7f.
- 14) ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン「日本語版の序文に寄せて」、ベルタ・フォン・ズットナー『武器を捨てよ！』（上）、ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年、4頁。
 - 15) Vgl. Wintersteiner, Werner: „Die Waffen nieder!“—Ein immer noch zeitgemässes Projekt. In: Lughofer, Johann Georg (Hrsg.): *Im Prisma. Bertha von Suttner „Die Waffen nieder!“* Edition Art Science. Wien-St. Wolfgang. o. J. S. 196.
 - 16) Ebd., S. 197.
 - 17) Aus Suttner, Arthur Gundaccar von: *Was man erlebt. Ein österreichisches Schriftstellerpaar*. In : *Die Gesellschaft I* (1887). S. 783.
 - 18) Suttner, Bertha von: *Doktor Helmut's Donnerstage*. Zitiert nach Katscher, *Zur Einführung!* S. XIII.
 - 19) ドイツ語の Mitleid という語には一般に「同情」「思いやり」「あわれみ」等の意味がある。筆者もズットナーの作品との関連では「同情」「同苦」等の訳語を用いてきたが、彼女が Mit-、mit-（共に）を伴う語を多用している意を汲んで、ここでは「共苦」と訳出した。
 - 20) Vgl. Hamann, S. 8.
 - 21) Suttner, Bertha von: *Doktor Helmut's Doonerstage*. Dresden, Leipzig 1892. S. 65ff.
 - 22) Katscher, *Zur Einführung!* S. XII.
 - 23) Zitiert nach: Brinker-Gabler, Gisela (Hrsg.): *Kämpferin für den Frieden: Bertha von Suttner. Lebenserinnerungen, Reden und Schriften*. Frankfurt am Main 1982, S. 14.
 - 24) Katscher, *Zur Einführung!* S. XII.
 - 25) Zitiert nach: *Vermächtnis und Mahnung zum 50. Todestag Bertha von Suttners*. Herausgeber: Internationales Institut für Frieden, Wien o. J. S. 26.
 - 26) Vgl. Biedermann, *Nicht nur Die Waffen nieder!: Bertha von Suttner*, S. 321.
 - 27) Suttner, Bertha von: *Schriftstellerroman*. Zitiert nach Hamann, S. 100.
 - 28) Suttner, Bertha von: *Der Menschheit Hochgedanken. Roman aus der nächsten Zukunft*. Verlag der Friedenswarte. Berlin-Wien-Leipzig o. J. [1911] S. 148.
 - 29) UNO Genf, Bibliothek, Collection Suttner-Fried, Man. Erinnerungen 10. Zitiert nach Hamann, S. 118.
 - 30) Vgl. Cohen, Laurie R.: *Arthur und Bertha von Suttners entscheidende Jahre im russischen Kaukasusu, 1876–1895*. In: Cohen, Laurie R. (Hrsg.): *Gerade weil Sie eine Frau sind... Bertha von Suttner, die unbekannte Friedensnobelpreisträgerin*. Wien 2005. S. 27.
 - 31) Suttner, Bertha von : *Wie ich dazu kam, "Die Waffen nieder" zu schreiben*. S. 7f.
 - 32) *Metzler Literatur Lexikon*. S. 320.
 - 33) Katscher, *Zur Einführung!* S. XIV.